

## 「木は地球を救う」 — 23

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

### ◇二代目の大鳥居

来年令和2年(2020)には創建100年を迎える明治神宮には外国人を含め毎年800万人の人が鳥居をくぐり参拝に訪れている。俗界と神域の境界と言われている鳥居は、神宮全体で8本あり、原宿口に面する大鳥居は一の鳥居、奥にある正殿前の第二鳥居は、昭和50年初代と同じ幅12m、高さ17.1m、柱の直径1.2mであり、材料には樹齢1,200年以上とされる材料も同じ台湾檜で、二代目の大鳥居として建て替えられたものだ。

### ◇木造鳥居では日本一⇒世界一

明治神宮の二の鳥居は、木造鳥居では日本一であり、日本一なら世界一であることで世界的にも有名である。前号でご紹介した初代の鳥居は大正9年(1920)に建立されたが老朽化が進み、昭和50年(1975)に二代目として建て替えられ、建立に貢献した東京在住の木材商・川島康資<sup>やすもと</sup>さんを「木材や」<sup>かがみ</sup>の鑑として数回にわたりご紹介している。

今号では、二代目の鳥居について詳しく報告します。

二の鳥居の材料となる台湾檜を巡って、明治神宮、日本人そして台湾人の感動的な物語があり、筆者の独断と偏見のドキュメントとして、読者の皆様にご紹介申し上げご参考に供すれば幸いです。

### ◇材料の調達

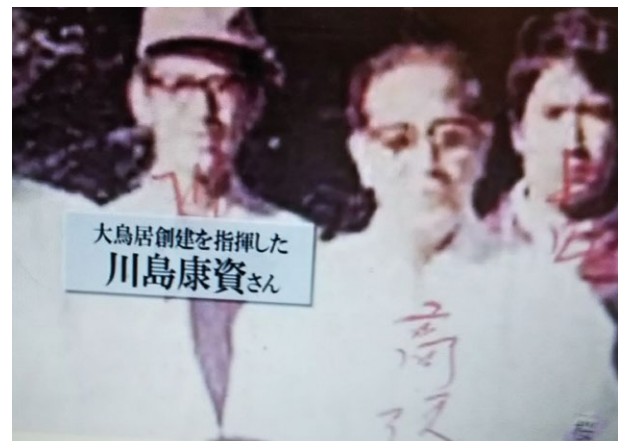
建て替えるに当たり、先ず大鳥居の材料をどのようにして手に入れるかが問題となったが、ここに篤志家が現れた。何度もご紹介した東京在住の木材商・川島康資さんである。川島さんは自分が二代にわたり木材業を営むことができたのは、ひとえに「明治神宮のおかげ様」であるとして「大鳥居の材料を献木」とする旨申し出た。この「意気軒高」な心意気、「木材や根性」を見た思いである。正に「木材や」の鑑と言っても言いすぎではないと心得ましたが、読者の皆様いかがでございましょうか。今の「木材や」はこの根性を見習うべきである。

もとより明治神宮としては異論がないはずだ。

ここから「二代目鳥居建立」のストーリーが始まる。

### ◇川島・孫海共同作業で巨木発見

川島さんは、何度も台湾檜の適木を求め台湾にわたり、林務局を訪ね、最高峰である新高山連峰の丹大山一帯に伐採権をもつ木材業で振昌木材興業のオーナー社長孫海さんと出会う。孫海さんは、川島さんから「明治神宮に使う鳥居の材料を探している。是非とも協力して欲しい」と頼まれると、



大鳥居創建を指揮した川島康資さん

この大仕事を即座に引き受けた。孫海さんは台湾の神社などに材料を納めている関わりが深い人だ。

しかし、この仕事は大変な難題である。川島さんの持ち込んだ仕事は、台湾檜の寸法として、長さ16m、末口1.4mの直材の檜丸太10本である。そのほかにやや小ぶりの檜丸太38本が加わった大仕事であった。

丹大山にはまだまだ巨木が残っていたので、見つける可能性は高いが、見つけたらどう運び出すか。こちらが大問題である。

#### ◇木は見つかった、どう運び出すか

孫海さんは丹大山をくまなく探し廻り苦心惨憺の末、断崖絶壁に聳え立つ銘木級の巨木群を発見した。先ず第一関門の木を見つけ出すことができた。サーこれからが大変どう運び出すかである。

#### ◇山から鉄道まで

第一関門の巨木発見と伐採はクリアした。しかしここから「どうやって鉄道駅まで持っていくか」で、孫海さんは考えられるあらゆる手段を使って挑戦した。ここが孫海さんの凄いところだ。絶対に諦めない。50年前に出来たことが今できないはずはない。「ネバーギブアップ」の精神で挑戦した。この精神が尊い。作今は「リスクあり」とみたら諦めるか、もっとひどいのは「近づかない方が無難」とばかり、「無理だ、出来ない」が先に立ちリスクを恐れチャレンジしない。「これでは、事は進まない」。孫海さんの精神を見習い、復活させねばならぬと存じます

が読者の皆さまいかがでございましょうか。ご批判ご意見を頂きたくお願い申し上げます。

#### ◇トラックの改造

伐採現場から、最も近い車呈<sup>しゃてい</sup>駅まで96kmだ。山道は幅4メートルの狭小な急坂道、運ぶため孫海さんは様々な方法を考えた。巨木は長さ16m、末口径1.4m、重さ35屯もある超大物だ。まずトラックを改造しなければならぬ。エンジンは250馬力の船舶用エンジンを取り付け、トラック2台をトレーラーのように繋ぐ。それぞれの荷台の中央に360度回転するターンテーブルを取り付けた。トラックの改造には1年ほどかかり昭和46年(1971)漸く完成、作業に取り掛かった。読者の方々はトラック2台連結のトレーラーをイメージ願えればと存じます。

海拔2,700mの高山から10本の木を選び、幅4メートルの林道を、ブルドーザを先頭に立て山道を下った。途中狭くなるところ、またはカーブしているところは、ブルドーザで削り道を造りながら恐る恐る進んだ。トラックの後ろには10数人が付き従い、難所にかかると知恵を働かし切り抜けてきた。このように苦心惨憺し、車呈駅までの96kmを運び、昭和46年(1971)7月、貨車でキールン港そして船で日本まで運んだ。



丹大山林業区



トラックに積まれた巨木

「巨木が山奥から降りてくる」という話を聞きつけて沿道には、巨木の使い道を知った多くの人々が詰めかけ、10本の巨木が通るたびに歓声を上げて出迎えてくれた。10本の巨木の最大のボリュームは長さ16m、重量は40屯を越える超大物だった。

◇どんな苦勞もいとわぬ人

孫海さんの子息孫国雄さん(現振昌興業社長)によれば、父は「使い道を知ったからにはどんな苦勞もいとわぬ」としてこの大仕事をやり抜けた。台湾木材業界の巨人であり、日本人の心を知り、技術を知り、神を敬う気持ちを共有した立派な人であった。

昭和54年(1979)62歳で逝去した。孫海さんは、16歳で亜里山林業局に奉職し、日本の林業技術を習得した。それは、計画伐採、計画植林、下刈り、草取りまでの計画的な手入れ、そして伐採する循環を習得していた。日本人の木を崇め大切にすることが神を奉る神社につながり、「木には神が宿る」との精神が今回の快挙につながったのではないか？

生前の孫海さんは頻繁に日本を訪れ、数々の著名人とも交流があった。奈良の薬師寺にもたびたび訪れ薬師寺館長の高田好胤さんとも交流が深く、台湾を訪れた際には、孫海さんと交流し台湾神社にお参りした。

出典：資料韓国さくらテレビ47号「明治神宮と台湾人の心」

新しい大鳥居 明治神宮提供のビデオから参照



丹大山の伐採権を有する 振昌興業 孫海さん